

改訂レッドリスト
付属説明資料

蘚苔類

平成 22 年 3 月

環境省自然環境局野生生物課

はじめに

「付属説明資料」は、平成18年12月及び平成19年8月に公表された改訂版レッドリストにおいて新規に掲載された種を基本に、それらの生息状況等を簡潔に解説したもので、本冊子は、その「蘇苔類」版です。

すでに刊行されているレッドデータブックと合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望れます。

改訂レッドリストの詳細については、以下のwebページを参照してください。

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8886>

掲載種と解説内容

平成19年8月3日に公表された植物II改訂レッドリストに掲載された蘇苔類285分類群（種・亜種・変種等）のなかから、同リストにおいて新規に掲載された63分類群について、以下の内容を簡潔に解説しました。なお、記載内容は原則としてレッドリスト公表時のものです。

○カテゴリー区分（新ランク及び[新規掲載]の表記）

○目名、科名

○和名

○学名、記載者名

○生息状況等、以下の項目を簡潔に記載

日本における固有性／形態と特徴／分布の概要／

生息地の現況とその動向／存続を脅かしている原

因とその種の危機の状況／保護対策

○参考文献

執筆

執筆はつぎの方々にお願いし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

岩月善之助（服部植物研究所）

神田啓史（国立極地研究所生物系資料部門）
長谷川二郎（南九州大学環境造園学部）
樋口正信（国立科学博物館植物研究部）
古木達郎（千葉県立中央博物館）

今後の対応

環境省では、レッドリストや本冊子について広く普及を図ることで、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存への国民の理解を深めるとともに、関係省庁や地方公共団体等に配布することにより各種計画における配慮等を促す予定です。

また、レッドリストの掲載種の中で特に保護の優先度が高い種については、さらに生息状況等に関する詳細な調査の実施等により情報収集を行い、その結果及び生息・生育地域の自然的・社会的状況に応じて「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を検討します。

なお、レッドリストは、今後とも、5年ないし10年ごとに再調査と見直しを行う必要があるものと考えられます。

環境省自然環境局野生生物課

蘇綱 シッポゴケ目 キヌシッポゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

ノグチゴケ *Brachydontium noguchii* Z.Iwats., Tad.Suzuki & H.Kiguchi

日本固有種。高地の土に覆われた岩上に生える。初め長野県の菅平で見つかり、アメリカから記載された *B. olympicum* と誤認されてきたが、日本産は 2004 年に新種として記載され、この学名が与えられた。微小で、茎は長さ 1.4~2.5mm、中心束は分化しない。葉は長さ 1.5mm 以下、幅広い基部から線状。中肋は葉身上部の大部分を占める。蒴柄は短く 0.4mm くらい、ほぼ球形の蒴は葉の間に隠れる。蒴歯はない。蓋は円錐形。確実な産地は九州（屋久島）と本州、北海道の 5か所。環境の変化によって消滅する可能性が高い。

【参考文献】 50)、64)

執筆者：岩月善之助（服部植物研究所）

蘇綱 シッポゴケ目 キヌシッポゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

オリンピックゴケ *Brachydontium olympicum* (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence

1910 年に北米西海岸のオリンピック山から記載されたが、最近日本にも生育することが報告された。茎はノグチゴケよりも長く 2.5~4.2mm、中心束は弱いながら分化する。葉は細い披針形で、先は尖り、長さ 1.75~2.30mm。蒴柄は長さ 1~1.3mm、多少湾曲する。蒴は卵形で葉の上に出る。蓋は嘴状に尖る。日本では富山県立山 2,300m の岩上に生育する。産地が少なく、絶滅の危険性が高い。

【参考文献】 50)

執筆者：岩月善之助（服部植物研究所）

蘇綱 シッポゴケ目 シッポゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

マエバラナガダイゴケ *Trematodon mayebarae* Takaki

日本固有種。石灰岩地を含む低地の土上に生育する。小型のセン類で葉は長さ 3mm 以下、鞘部は卵形、上部は針状に延び、中肋で占められる。蒴柄は長さ 0.5~1.5cm、蒴は 3.2~3.7cm の長さがあり、頸部は壺とほぼ同長。蒴歯の全面に密なパピラがあることで、同属の他の種から区別される。1936 年から 1959 年にかけて、前原寛二郎氏により、熊本県人吉市及び球磨郡の 3か所で採集されたが、生育地の詳細が記録されておらず、近年の調査で確認できなかった。環境の変化によって絶滅に近づいている可能性が高い。

【参考文献】 41)、51)

執筆者：岩月善之助（服部植物研究所）

蘇綱 ホンマゴケ目 クサスギゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

ラクヨウクサスギゴケ *Timmia norvegica* Zett.

茎の横断面で大きな中心束がある。葉は乾燥すると巻縮するが、落ちやすい。葉は広い披針形から細く尖り、基部は鞘になる。葉縁の上部には鋭い鋸歯がある。中肋は葉先の手前で終り、背面にはパピラがあること、葉身細胞は背面で平滑であるが、腹面で高い円筒形のマミラをもつこと、葉鞘部の細胞は透明で壊れやすいなどの特徴で同属のミヤマクサスギゴケから区別される。亜寒帯の石灰岩地に生育し、これまでに欧州、北米、グリーンランド、ロシア、中国から報告されており、国内では長野県で最初に発見された。日本の産地が世界の南限にあたる。石灰岩の採掘などにより環境変化が起こり、消滅する可能性がある。

【参考文献】 4)、55)

執筆者：神田啓史（国立極地研究所）

蘚綱 シトネゴケ目 コゴメゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

カマバコモチゴケ *Habrodon perpusillus* (DeNot.) Limpr.

ヨーロッパに広く分布するが、日本では南アルプスの二軒小屋（標高約 1,400m）近くのコメツガ上から報告されたのが唯一の記録である。小型で植物体は糸くず状、葉は卵形、葉先は漸尖し、中肋を欠く。葉細胞は平滑。日本では蒴は見つかっていない。2～5細胞からなる楕円形～紡錘形の無性芽を茎の上部や枝の上につける。今回のレッドリストの見直しに際し南アルプス二軒小屋近くで本種を確認したが、この場所が日本における唯一の生育地である。日本では生育地は局限されており、その保護が必要である。新しい生育地の発見が望まれる。

【参考文献】 46)

執筆者：岩月善之助（服部植物研究所）

蘚綱 シトネゴケ目 シノブゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

ヌマシノブゴケ *Helodium paludosum* (Austin) Broth.

茎は約 6 cm、羽状に分岐する。茎葉には縦じわがあり、卵形の基部から細く漸尖する。葉の基部に毛葉がある。中肋は葉先近くに達するが、背面は平滑。葉身細胞は長楕円形、平滑。時々、細胞壁の上部が弱く盛り上がる。雌雄同株。日本から蒴は発見されていない。葉縁および中肋の背面が平滑であることで同属のカラフトシノブゴケから区別される。本種は湿地の土壤、腐食土、朽木、樹木基部に生育するので、湿地の環境変化により、生育地が消滅する可能性がある。これまでに北海道、本州、中国、ロシア、北米から報告がある。

【参考文献】 42)

執筆者：神田啓史（国立極地研究所）

蘚綱 シトネゴケ目 ハイゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

ヤワラクシノハゴケ *Ctenidium molluscum* (Hedw.) Mitt.

中型の匍匐性のセン類で、規則的に羽状に分枝する。葉は強く鎌形に曲がり、葉細胞の先端部が強く突出する。枝が密に規則的に分枝し水平に広がること、卵形～被針形の枝葉が長く鎌形に曲がる先端部をもつことで同属の他種と区別される。ヨーロッパ、トルコ、シベリア、アラスカなどから報告されており、日本での生育は 2000 年に報告された。国内では本州と四国 の 3か所に生育している。いずれも石灰岩地で、石灰岩の採掘などにより環境が変化したり、生育地が消滅する可能性が高い。

【参考文献】 38)

執筆者：樋口正信（国立科学博物館）

蘚綱 シトネゴケ目 イワダレゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

フウチョウゴケ *Macrothamnium macrocarpum* (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.

やや大型の匍匐性のセン類で、不規則に分枝する。葉は基部が広い卵形で、葉縁にはやや大きな鋸歯がある。ヒマラヤ、東南アジア、中国、台湾から報告されており、日本が分布の北限である。国内では静岡県と屋久島の 2 か所から記録されていたが、静岡県では再確認されておらず、屋久島では 2006 年に 68 年ぶりに生育が確認された。屋久島の生育地は標高 600 m 付近の沢の岩上で、生育量は少ない。増水時の冠水により消滅する可能性が高い。

【参考文献】 1)、5)、39)、40)

執筆者：樋口正信（国立科学博物館）

蘚綱 シトネゴケ目 イワダレゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

オオシカゴケ *Neodolichomitra yunnanensis* (Besch.) T.J.Kop.

大型の匍匐性のセン類で、1属1種。羽状に1~2回分枝し、樹状になる。葉は基部が広い卵形で、深く凹む。葉の先端は通常ねじれる。中肋は1本で長く、しばしば分枝する。ブータン、中国西南部、台湾に隔離分布し、日本が北限である。国内では1998年に長野県から初めて報告された。川沿いの林床にある腐植土で覆われた岸壁や倒木上に生育するが、生育量は少ない。森林の伐採、増水時の冠水などにより消滅する可能性が高い。

【参考文献】 17)

執筆者：樋口正信（国立科学博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

マエバラアミバゴケ *Anastrophyllum bidens* (Nees) Steph.

日本から東南アジアにかけて分布する。日本では屋久島の高地において湿性林の樹幹に着生する。植物体は茎葉状、暗赤色、匍匐ないし斜上し、長さ約1cm、幅約1.3mm。葉は2/3まで不等に2裂し全縁である。裂片が狭三角形で鋭尖することにより近縁種から区別される。これまで数か所でしか確認されていなかったが、最近の調査では絶滅した産地もあり、微量しか確認できない。減少は著しいが、その要因は明らかでなく、何らかの環境変化によると思われる。

【参考文献】 25)、27)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

オノイチョウゴケ *Anastrophyllum ellipticum* Inoue

日本固有種。長野県八ヶ岳の亜高山帯シラビソ林の倒木上に生育することが知られている。植物体は茎葉状、暗赤色、斜上し、長さ1~1.5cm、幅0.5~0.8mm。葉は1/3~1/2まで不等に2裂し、裂片が三角形で鋭頭、全縁である。無性芽が2細胞性で橢円形であることから同属の他種から区別される。1978年に新種記載された。生育範囲が限られており、最近の調査では確認できない。生育基物の倒木が山小屋の薪に利用されるために減っており、絶滅が危惧される。

【参考文献】 22)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

カラフトイチョウゴケ *Anastrophyllum saxicola* (Schrad.) R.M.Schust.

北半球の冷温帯に分布する。日本では長野県の高山帯ハイマツの林床に3か所が知られている。植物体は茎葉状、黄褐色、茎は斜上し、長さ約3cm、幅1.5~1.8mm。葉は1/2まで不等に2裂し、裂片は広三角形で鈍頭、全縁である。背側の裂片が著しく小さく、ヒシャクゴケ属のように見えることが特徴である。最近の調査では確認できない産地があり、生育数が減っている。何らかの環境変化によると思われる。

【参考文献】 27)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ウロコゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

トゲバウロコゴケ *Heteroscyphus wettsteinii* (Schiffn.) Schiffn.

日本と東南アジアに分布する。日本では西表島の渓谷に生育する。植物体は茎葉状、長さ 1~2.5cm、幅 2~4mm。葉は斜めにつき、瓦状に重なり、広く開出し、矩形、先端は3裂し、3~6細胞からなる長い毛がある。腹葉は小さく、葉と同様に長い毛がある。花被は知られていない。葉縁の長い棘のような毛は同属の他種から区別する特徴であり、和名の由来でもある。生育範囲が限られており、生育数も少なかったが、最近の調査では確認されておらず、絶滅した可能性もある。何らかの環境の変化が要因であると思われる。

【参考文献】 6)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 チチブイチョウゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

モグリゴケ *Lethocolea naruto-toganensis* Furuki

日本固有種。千葉県九十九里平野の湿原に生育する。植物体は茎葉状、緑色、長さ 1~2cm、幅約 2mm。葉は瓦状につき、斜めに開出し、背側に偏向し、心臓形、全縁。花被はなく、マルスピウムが地中にもぐる特徴が和名になった。円盤形の無性芽を葉縁につける。生育地は国指定天然記念物地域内の湿原であり保護されているが、乾燥化が進み、人為的な植生管理によって維持されており、極く狭い範囲にしか生育しておらず、絶滅が危惧される。

【参考文献】 25)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ミズゴケモドキ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

オオミズゴケモドキ *Pleurozia gigantea* (F.Weber) Lindb.

アフリカとアジアの熱帯～南太平洋地域に広く分布するが、日本では屋久島が唯一の生育地となっている。森林内の樹幹や枝の上に大きなマットをつくって生育する。植物体は茎葉状、紅色の混ざった黄緑色で、立ち上がるか垂れ下がり、長さ 12cm に達する。葉は背片と腹片に2裂し、背片の縁は波打ち、鋸歯があり、腹片は袋状で角状に尖る。大型でよく目立つ種であるにもかかわらず、1951 年に屋久島で確認されて以来記録がなく、最近 20 年間の調査でも生育が確認されておらず、絶滅した可能性もある。

【参考文献】 56)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔類 ウロコゴケ目 ケビラゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

オガサワラケビラゴケ *Radula boninensis* Furuki & Yamada

日本固有種。小笠原諸島母島石門の隆起石灰岩に生育する。植物体は茎葉状、匍匐し、長さ約 1cm、幅 1~1.5mm。葉は倒瓦状に重なり、広く開出、扁平に展開、大きな背片と小さな腹片に2裂し、折り目が弓形のキールになる。背片は円形、全縁、縁に円盤状の無性芽をつける。腹片は矩形。腹葉はない。生育地は周辺の崖崩れにより森林が荒廃しており、乾燥化が進み、生育数が減っている。環境の回復が待たれる。

【参考文献】 13)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ヤスデゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

サカワヤスデゴケ *Frullania sackawana* Steph.

日本とタイ、ラオス、中国に分布する。日本では埼玉県以南の本州、四国の低地に分布する。岩上や樹幹上に生える。植物体は茎葉状で赤褐色～黄褐色、やや大型（長さは5 cmに達する）で規則的に分枝する。葉の背片の背側基部は耳状にふくれず、腹片は棍棒状で背片下縁より下垂し、腹葉の基部も耳状にふくれない。最近の調査では分布の北限にあたる埼玉県では確認されず、四国や近畿地方では激減している。産地が少なく、生育地周辺の開発による環境の変化によって消滅するおそれがある。

【参考文献】 65)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

ホソバイトクズゴケ *Cololejeunea angustiloba* (Horik.) Mizut.

日本と中国に分布する。日本では三重県と九州に数か所の産地が知られている。樹幹上やシダの葉上でごく少量が他のコケに混ざって生育している。植物体は茎葉状で極めて小さく、長さ2 mm ぐらいの茎に長卵形か披針形（一部は棍棒状）の長さ0.15 mm ぐらいの葉がまばらについているだけである。雌花は茎の先端につき、花被は5 褶。過去40年採集記録がなく、最近の調査でも確認できない。生育地、生育量ともに少なく、生育地の乾燥化などの環境の変化によって消滅する可能性が高い。

【参考文献】 37)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

キララヨウジョウゴケ *Cololejeunea ceratilobula* (P.C.Chen) R.M.Schust. (Syn. *C. formosana* Mizut.)

東アジア、東南アジアに広く分布する。日本では、西表島、石垣島、屋久島、宮崎県で産地が知られている。常緑樹林内の樹木の葉に着生する。植物体は茎葉状、黄緑色で小さく（茎の長さは約5 mm）、着生した葉の表面に密着している。葉は広橢円形で、背片の縁は波状に曲がった透明な細胞によって縁取られ、腹片は三角形で第1歯が細長く毛状に伸びる。産地が少なく、北限の宮崎県では最近、生育地が激減している。渓流沿いの湿度の高い林に生育するので、生育地周辺の環境の変化には細心の注意を必要とする。

【参考文献】 68)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

オチクサリゴケ *Lejeunea otiana* S.Hatt.

日本と中国に分布する。日本では近畿、四国、九州にまれに産する。渓流沿いの湿った岩の上に生える。植物体は茎葉状で暗緑色。茎は匍匐、長さ5～10 mm。葉は広く斜めに開出し、背片は卵形で、長さ約0.6 mm。葉の腹片は長方形で、長さは背片の1/6～1/3、第2歯がなく、第1歯は3～4細胞の長さで鋭く尖る。国内3か所からの報告があるが、最近はそれらの産地での生育は確認されていない。最近の調査で新たに宮崎県で2か所の生育地を確認したが、生育量は少ない。これらの産地は自然のよく保たれた渓流沿いにあり、生育地周辺の自然を保護する必要がある。

【参考文献】 31)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

ゴマダラクサリゴケ *Stictolejeunea iwatsukii* Mizut.

日本固有種。沖縄県西表島の岩上に生育する。植物体は茎葉状、褐色、匍匐し、長さ1~1.5cm、幅1~1.5mm。葉は倒瓦状に重なり、背片は広卵形、全縁で円頭。腹片は背片の約1/5長、第1歯は基部で1~2細胞幅、2~3細胞長、第2歯は不明瞭。腹葉は円形、茎径の約3倍幅。雌雄同株。日本産は1属1種で、眼点細胞が背片、腹片、腹葉に散在し、和名の由来になっている。この散在する眼点細胞と腹葉が円形であることで他属から区別される。最近の調査においても1か所でしか確認できず、生育量が少なく、絶滅が危惧される。

【参考文献】 25)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 フタマタゴケ目 ウロコゼニゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

ヤソガタケウロコゼニゴケ

Fossombronia pusilla (L.) Dumort. (Syn. *F. wondraczekii* var. *loitlesbergeri* auct. non (Schiffn.) Müll.Frib.)

ヨーロッパ、北アフリカ、ヒマラヤ、中国、ニューギニア、ハワイ等の高地に分布する。日本では八ヶ岳山頂付近の湿崖上に知られ、和名の由来になっている。植物体は茎葉状、淡緑色、匍匐し、長さ約1cm、幅1.5~3mm。茎は二叉状に分枝し、先端付近裏面に1~3細胞長の腹鱗片がある。葉は半円形。腹葉はない。雌雄異株。花被は杯形。胞子の遠心面に放射状に広がる山脈状の薄板があることで近縁種から区別される。生育範囲が狭く、生育量が少ないため、絶滅が危惧される。

【参考文献】 25)、29)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 フタマタゴケ目 クモノスゴケ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

ヤマトヤハズゴケ *Moerckia japonica* Inoue

日本固有種。東北地方と富山県の高山の3か所に知られ、草原や湿地に生育する。植物体は葉状、匍匐し、黄緑色、長さ2~3cm、幅3~8mm。中肋部は不明瞭で、中心束はない。雌雄異株。包膜が鱗片状で、円筒状の偽花被の後方のみにあることを特徴とする。近年生育が確認できない産地があり、生育数が減っているが、原因は不明である。

【参考文献】 23)、25)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

蘇綱 ホンマゴケ目 ハリガネゴケ科

VU (絶滅危惧 II 類) [新規掲載]

ホソバゴケ *Mielichhoferia japonica* Besch.

茎は1~3cm、光沢のある鮮緑色の芝生を作る。葉は狭い卵状披針形、葉先に向かって鋭く尖る。葉縁に軸はなく、平坦で、上部に鋸歯がある。葉身細胞は薄壁であるが、表面にベルカがある。雌雄異株。生殖器は茎の基部の短い側枝にできる。同属のコシノシノブゴケとは細胞が六角形~菱形、中肋が葉先近くで終わるなどで区別される。これまでに日本（北海道、本州、四国）とロシアで知られている。本種は火山地帯の硫氣孔近くの岩上に生える。観光開発などで、生育地の環境が変化し、消滅する可能性がある。

【参考文献】 44)

執筆者：神田啓史（国立極地研究所）

蘚綱 シトネゴケ目 シノブゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

スギノシノブゴケ *Bryochenea vestitissima* (Besch.) Touw

茎は3～5 cm、規則的に2回羽状に分岐する。毛葉は茎から枝に至るまで全体に生える。茎葉は三角形、先端で鋭く尖り、鎌状に曲がる。葉縁全体に微鋸歯がある。中肋は葉身の4/5に達し、背面にパピラがある。葉身細胞は方形～長方形、細胞に1個のパピラがある。葉先付近の細胞は平滑。枝葉は窪み、三角形～卵状三角形、短く尖る。これまでに日本(本州)、台湾、中国、インドから報告されている。森林内の腐食土、石灰岩のがけに生育する。森林伐採、石灰採掘などによって、環境が変化し、消滅する可能性がある。

【参考文献】 58)、61)

執筆者：神田啓史 (国立極地研究所)

蘚綱 シトネゴケ目 ナガハシゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

リュウキュウホソエゴケ *Trichosteleum lutschianum* (Broth. & Paris) Broth.

小型の匍匐性のセン類で、しばしば羽状に分枝する。枝は立ち上がり、深く凹んで長く尖る先端部をもつ葉を密につける。葉細胞は薄壁で細長く、背面の中央に1つのパピラがあるが目立たない。中肋を欠く。本州、四国、九州に知られていたが、1999年に中国東南部から報告された。照葉樹林内の岩上や倒木上などに生育する。森林の伐採などにより生育地が減っており、消滅する可能性がある。

【参考文献】 43)、47)

執筆者：樋口正信 (国立科学博物館)

苔綱 ウロコゴケ目 ヤバネゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

フクレヤバネゴケ *Nowellia aciliata* (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.

日本と中国に分布する。日本では、屋久島が唯一の産地である。低山地の腐木上に生える。植物体は茎葉状、緑～褐色で、基物上を匍匐する。茎の長さは7～13 mm、葉は背側に偏向した卵形で、頂部は浅く2裂し、先端のとげは2～4細胞の長さ、腹縁は著しく内側に巻き込んで袋状になる。屋久島の1か所(鈴川沿いの標高200～500 mの範囲)で採集された3点の標本で確認されていたが、2006年の調査により生育量が非常に少ないことが判明した。唯一の生育地であるこの場所を保護する必要がある。

【参考文献】 36)

執筆者：長谷川二郎 (南九州大学)

苔綱 ウロコゴケ目 コヤバネゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

タガワヤバネゴケ *Cylindrocolea tagawae* N.Kitag.

日本から東南アジアにかけて分布する。日本では沖縄県八重山諸島の湿った林床の岩上に生育する。植物体は茎葉状、濃緑色、匍匐し、長さ数mm、幅約0.5mm。葉は斜めから縦につき、1/5まで浅く2裂する。腹葉はない。葉身細胞の表面にベルカがある。雌雄異株。花被は長紡錘形。茎が扁平で、葉がほぼ縦についていることで近縁種から区別される。生育地と生育量が少なく、絶滅が危惧される。

【参考文献】 63)

執筆者：古木達郎 (千葉県立中央博物館)

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

タチクモマゴケ *Anastrepta orcadensis* (Hook.) Schiffn.

ヒマラヤ、東アジア、北アメリカ西部、ヨーロッパ西部に不連続に分布する。日本では長野県の高山の5か所で知られ、林床に生育する。植物体は茎葉状、褐色、斜上し、長さ5cm、幅約2mm。葉は斜めにつき、広く開出し、背側に凸面状になる。腹葉は小さく痕跡的。雌雄異株。花被は紡錘形。葉先が浅く2裂し、腹縁が著しく外曲することを特徴とする。近年、登山者の増加などの影響により絶滅した産地があり、絶滅が危惧される。

【参考文献】 25)、27)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

ハンデルソロイゴケ *Jungermannia handelii* (Schiffn.) Amak.

日本、ヨーロッパ、東アジアに不連続に分布する。日本では秋田県鳥海山と長野県八ヶ岳に知られている。植物体は茎葉状、黄緑色、水中に斜上し、長さ数cmになり、幅1~2mm。葉は斜めにつき、広卵形、全縁、円頭。腹葉はない。花被は紡錘形で3稜。葉が大きな細胞で縁取られ、各葉身細胞に均質で大きな油体を2個含むことで近縁種と区別される。産地は保護地であるが、河川や湧水による強酸性水域の湿地に生育し、環境の変化が危惧される。

【参考文献】 3)、11)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

ヒラウロコゴケ *Nardia compressa* (Hook.) Gray

北半球の冷温帯に不連続に分布する。日本では秋田県鳥海山と福島県吾妻山に知られている。植物体は茎葉状、緑色、水中に斜上し、長さ数cmになり、幅約2mm。葉は横につき、左右に圧接、円形、全縁。腹葉は小さく目立たない。生殖器官は知られていない。葉が茎の左右に圧接することで識別される。産地は保護地域内にあるが、河川や湧水による強酸性水域の湿地に生育し、環境の変化が危惧される。

【参考文献】 2)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 オヤコゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

ヤクシマオヤコゴケ *Schistochila yakushimensis* Ohnishi & Deguchi

日本固有種。鹿児島県屋久島の湿性林に着生する。植物体は茎葉状、樹幹に着生、鮮緑色から赤褐色、長さ約2cm、幅2~3mm。葉は腹片と背片に2裂する。背片は腹片の約1/2長、長楕円形、縁に鋸歯ないし長毛があり、鋭頭から鋭尖。腹片は背片に似るがほぼ全縁。腹葉は茎の約2倍幅、不規則に2裂し、縁に毛がある。葉身細胞に大きなトリゴンがある。生殖器官は未知。葉のキールに2枚の翼部をもつことで近縁種と区別される。2003年に記載された新種で、生育範囲が狭く、生育数も少なく、絶滅が危惧される。

【参考文献】 45)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ヤスデゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

キヤスデゴケ *Frullania gaudichaudii* (Nees & Mont.) Nees & Mont.

汎熱帯に広く分布する。日本では沖縄県八重山諸島、沖縄島、鹿児島県奄美大島の、湿度の高い渓谷の樹幹や枝から懸垂する。植物体は、茎葉状、黄褐色、樹幹や枝から懸垂し、長さ10cm以上になり、幅2~3mm。葉は倒瓦状に重なり、不等に2裂し、卵形の背片と円筒形の腹片になる。腹葉は茎径の約4倍幅、1/4まで2裂し、側縁に鋸歯がある。雌雄異株。花被は卵形で稜が低い。腹片が非常に小さく、背片の約1/10で、懸垂することから識別は容易である。開発や森林の荒廃により生育地が減っている。

【参考文献】 25)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ヤスデゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

イボヤスデゴケ *Frullania repandistipula* Sande Lac.

東南アジアと日本に分布する。日本では小笠原諸島の湿性低木林において着生する。植物体は茎葉状、赤褐色、長さ約1.5cm、幅2~3mm。茎は羽状に分枝する。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片に不等に2裂する。背片は円形、やや尖り、縁にしばしば仮根状の毛があり脱落しやすい。腹片は円筒形で表面に著しい凸突起がある。雌雄異株、胞子体は知られていない。和名は腹片の表面のいぼに由来し、この特徴によって近縁種から区別できる。父島では森林が荒廃しており、生育数が激減している。

【参考文献】 10)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

アマカワヒメゴヘイゴケ *Archilejeunea amakawana* Inoue

日本と中国に分布する。日本では南九州と屋久島、石垣島、西表島から報告されている。低山地の林や社寺林の樹幹に着生する。植物体は茎葉状で褐緑色。茎は長さ5~15mmで不規則に分枝する。葉の背片は重なり、長楕円形で長さ約0.5mm、著しく鎌状になり円頭。葉の腹片は背片の約1/2の長さで、歯牙は2~4細胞の長さ。腹葉は離れてつき、全縁。これまで4か所の産地しか知られていなかったが、最近の調査で新たに宮崎県の自然のよく保たれた社寺林で確認された。産地が少なく、生育地の環境を保全する必要がある。

【参考文献】 18)、35)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

リュウキュウシゲリゴケ *Cheilolejeunea ryukyuensis* Mizut.

日本と中国に分布する。日本では沖縄県琉球列島の数か所のマングローブ林において樹幹に着生している。植物体は茎葉状、長さ約1cm、幅は1~1.5mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片に2裂する。背片は円形、全縁。腹片は背片の長1/3長、方形、第1歯はなく、第2歯も不明瞭。腹葉は茎の約3倍幅、約1/2まで2裂する。雌雄異株。腹片の形や鋸歯の特徴から近縁種と区別される。産地は開発により荒廃しており、減少している。

【参考文献】 32)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

オオシマヨウジョウゴケ *Cololejeunea inflata* Steph. (Syn. *C. oshimensis* (Horik.) Benedix)

東南アジア～日本まで広く分布する。日本では近畿地方以西、琉球列島まで広く分布する。常緑樹林内の樹木の葉やシダや草の葉に着生する（まれに樹幹に着生する）。植物体は茎葉状で薄緑色、茎の長さは約5mmで、着生した葉に密着して生育する。葉の背片は広卵形で、基部から中央にかけて3～4列の眼点細胞が並び、縁は2～3列の透明細胞で縁取られる。葉の腹片の長さは背片の約1/2。最近の調査で、宮崎県では生育地が激減していることが判明した。生育地周辺の環境を保護する必要がある。

【参考文献】 69)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

ヤマトケクサリゴケ *Cololejeunea schmidtii* Steph. (Syn. *C. nipponica* (Horik.) S.Hatt.)

日本と台湾に分布する。日本では宮崎県、屋久島、琉球列島に分布する。湿度の高い常緑樹林内の樹木やシダの葉に着生する。植物体は茎葉状、薄緑色で非常に小さく（茎は長さ約2.5mm）、着生する葉に密着して生育する。葉は卵形で背側の縁にはとげ状の突起があり、腹片の長さは背片の約1/2で、キールには乳頭状の突起がある。沖縄では生育状態が良好な産地もあるが、最近の調査で宮崎県からは確認されず、屋久島でも減少していることが判明した。分布の北限の宮崎県では、生育地の環境の変化によって消滅するおそれがある。

【参考文献】 57)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

カギヨウジョウゴケ *Cololejeunea subfloccosa* Mizut.

日本固有種。近畿地方と南九州、屋久島に少数の産地が知られている。湿度の高い林の樹幹や生葉に着生する。植物体は茎葉状、薄緑色で小さく、茎の長さは3～5mm。葉の背片は卵形で、全縁、基部から中央にかけて4～5個の眼点細胞が1列に並び、各細胞の背面に乳頭がある。パロイカスで花被は倒卵形。稀産種であるが、最近の調査で、近畿地方や宮崎県では著しく減少していることが明らかになった。生育地の環境の変化によってさらに減少する可能性があり、生育地周辺の森林の環境を保全する必要がある。

【参考文献】 34)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

イヌイムシトリゴケ *Colura inuui* Horik.

日本と台湾に分布する。日本では種子島～琉球列島にかけて少数の産地が知られている。渓流沿いの林や空中湿度の高い山頂部の林の樹幹や樹枝、生葉に着生する。植物体は茎葉状で淡黄緑色。茎は匍匐、長さ3～8mm、密に集まって生える。葉は茎から立ち上がり、広卵形で縁に鈍歯があり、腹縁は筒状に巻き上がり袋状になる。袋のバルブの厚膜細胞群は2細胞の薄膜細胞を介して葉とつながる。分布の北限の種子島では、渓流沿いの生育地の林の荒廃によって絶滅したと考えられる。生育地周辺の森林を保護する必要がある。

【参考文献】 15)、33)、62)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

オオハラバクサリゴケ *Lejeunea sordida* (Nees) Nees

日本から東南アジアにかけて広く分布する。日本では小笠原諸島、火山列島の数か所に知られ、湿った岩上に生育している。植物体は茎葉状、緑色、匍匐し、長さ約1cm、幅約1mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片に2裂する。背片は円形、円頭。腹片は背片の約1/5長、第1歯はなく、第2歯は尖る。腹葉は非常に大きく、葉と同大、1/3まで浅く2裂し、鈍頭。生育地が分断されており、いずれの産地においても生育数が少ない。

【参考文献】 8)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

ツメクサリゴケ *Stenolejeunea apiculata* (Sande Lac.) R.M.Schust.

日本から東南アジアに広く分布する。日本では琉球列島と小笠原諸島の数か所に知られ、湿った林内の岩上に樹幹に生育している。植物体は茎葉状、緑色、匍匐し、長さ約5mm、幅約0.5mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片に2裂する。背片は三角形、鋭尖。腹片は背片の1/3長、第1歯が単細胞からなり、第2歯は不明瞭。腹葉は1/2-2/3まで深く2裂し、裂片が狭三角形である。生育地が分断されており、いずれの産地においても生育数が少ない。

【参考文献】 25)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ゼニゴケ目 ジンガサゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

オキナワサイハイゴケ

Asterella wallichiana (Lehm. & Lindenb.) Pande et al. ex Grolle (Syn. *A. liukiuensis* (Horik.) Horik.)

インド、ネパール、中国南部、東南アジア、台湾～日本の琉球列島まで広く分布する。森林内の石灰岩上や沢沿いの湿岩上に生え、しばしば大きな純群落を形成する。植物体は葉状で匍匐、黄緑色～緑色、二叉状に分枝し、長さ1.5～2.5cm、幅3～4mm、独特の臭気を有する。雌雄異株で、雌器托は短い柄を有し、雌器床は半球形で1～2裂し、2～4個の偽花被をもつ。沖縄島、石垣島、西表島、奄美大島に生育地が知られているが、多くの産地では生育量が少なく、大きな群落を形成していた西表島の産地でも減少傾向が著しい。

【参考文献】 19)、30)、62)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

ツノゴケ綱 ツノゴケ目 ツノゴケ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

オガサワラキブリツノゴケ *Dendroceros tubercularis* S.Hatt.

台湾と日本の小笠原諸島（母島）、沖縄島、石垣島、西表島に分布する。空中湿度の高い渓谷の樹幹上や岩上、または雲霧帯の樹木の枝上に生育する。植物体は鮮緑色～濃緑色、葉状で匍匐、葉状体は長さ約2cm、幅約2mmで、中央部の中肋と1細胞層の翼部からなり、翼部の縁は波状に巻縮する。蒴はつの状で、蒴壁に気孔はなく、表皮細胞は結節状に肥厚しない。琉球列島では生育地の開発などで減少傾向が顕著で、生育量の多かった小笠原諸島でも数年前の台風による潮焼けのため減少していることが判明した。

【参考文献】 14)、62)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

蘚綱 タチヒダゴケ目 タチヒダゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

マゴメゴケ *Rhachithecium perpusillum* (Thwaites & Mitt.) Broth.

2004 年に岐阜県の馬籠から日本新産として報告された。小型で配偶体は葉を含めて 1.5~2.0mm、あまり分枝しない。葉は倒卵形～へら形で、長さ 1.3~1.6 mm。雌苞葉は鞘状で蒴柄の下部を包む。蒴は卵形で乾くと明瞭な縦ひだができる。蓋は円錐形、蒴歯は 1 列。胞子は径 20~25 μ m。帽は僧帽形で、表面の細胞の上端が乳頭状に突出してざらつく。葉腋にしばしば数細胞からなる橢円形の無性芽をつける。日本での記録は上記の 1 か所のみ。産地が人為の及びやすい所であることから、十分な保護が必要である。日本各地での調査が望まれる。

【参考文献】 49)

執筆者：岩月善之助（服部植物研究所）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

コダマイチヨウゴケ *Anastrophyllum hellerianum* (Nees ex Lindenb.) R.M.Schust.

北半球寒帯に広く分布する。日本では奈良県と長野県の 3 か所の亜高山帯に知られている。植物体は茎葉状、褐色、匍匐し、長さ約数 mm、幅 0.5~1 mm。葉は茎の背側に偏向し、1/4~1/3 まで 2 裂し樋状、全縁、裂片は鋭尖。腹葉はない。雌雄異株。花被は長紡錘形。属内では雌苞葉の縁が鋸歯状であることにより識別できる。いずれの記録も古く、近年の調査が不十分であり、再調査が望まれる。

【参考文献】 27)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ミツデモミジゴケ *Barbilophozia floerkei* (F.Weber & D.Mohr) Loeske

北半球の寒帯、南アメリカ北部などに分布する。日本では富山県立山の高山帯林床にのみ知られている。植物体は茎葉状、緑褐色、匍匐し、長さ約 2.5cm、幅約 2 mm。葉は 1/5~1/4 まで浅く 3 裂し、裂片は鋭頭、基部に毛状の突起がある。腹葉は大きく、深く 2 裂し、裂片基部に長毛がある。生殖器官は未知。3 裂する葉と大きな腹葉によって同属の他種から区別される。1967 年に報告されて以来、生育に関する記録がなく、再調査が望まれる。

【参考文献】 28)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

リシリツボミゴケ *Jungermannia hokkaidensis* Váňa

日本固有種。北海道利尻島にのみ知られている。植物体は茎葉状、褐色、斜上し、長さ数 mm、幅約 1 mm。葉は斜めにつき、卵形、全縁。葉身細胞は薄壁、トリゴンは小さい。腹葉はない。雌雄異株。花被は卵形で、稜が不明瞭、ペリギニウムが発達し、苞葉が花被の中部につく。植物体が小さいことやペリギニウムが発達し、花被が苞葉に隠れることで同属の他種から識別される。1960 年に報告されて以来、記録がなく、最近の調査でも確認されておらず、詳細な調査が望まれる。

【参考文献】 3)、59)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

オオイチヨウゴケ *Leiocolea collaris* (Nees) Schljakov (Syn. *Lophozia collaris* (Nees) Dumort.)

北半球寒帯に広く分布する。日本では南アルプス仙丈岳に知られている。植物体は茎葉状、緑色、匍匐し、長さ1~3m、幅1~2mm。葉はやや横に広く、1/4-1/3まで2裂し、裂片は三角形、鋭頭。腹葉は大きく、長三角形、縁に数本の毛をもつ。葉身細胞はトリゴンが小さく、表面に弱いベルカがある。横広の葉と大きな腹葉で近縁種から区別される。報告は1970年で、記録が古く曖昧であり、再調査が望まれる。

【参考文献】 52)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

マルバイチヨウゴケ *Lophozia obtusa* (Lindnb.) A.Evans

北半球寒帯に広く分布する。富山県ワリモ岳の高山帯林床に知られている。植物体は茎葉状、濃緑色、匍匐し、長さ約2cm、幅約1.5~2mm。葉は1/4-1/3まで2裂し、裂片の先端は円頭。腹葉はない。生殖器官は未知。和名は葉が円頭であることに由来し、この特徴によって同属の他種から区別される。1967年に報告されて以来、生育に関する記録がなく、再調査が望まれる。

【参考文献】 28)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ミヤマウロコゴケ *Nardia breidleri* (Limpr.) Lindb.

日本とヨーロッパ、北アメリカに分布する。日本では長野県木曽御嶽山と八ヶ岳の亜高山帯に知られている。植物体は茎葉状、褐色、長さ数mm、幅約0.5mm。葉は先端が約1/2まで2裂し、裂片は三角形。腹葉は小さく、痕跡的。葉身細胞のトリゴンは小さく、各細胞に1個の油体を含む。ペリギニウムが発達し、花被は円錐形で短く、苞葉に隠れる。植物体が小さく、葉が2裂することが特徴である。最近は調査が行われておらず、再調査が望まれる。

【参考文献】 2)、60)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ツボミゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ヒトスジウロコゴケ *Nardia unispiralis* Amak.

日本固有種。北海道利尻島と山形県鳥海山、長野県八ヶ岳の亜高山帯以上の3か所で知られ、岩上に生育する。植物体は茎葉状、黄緑褐色、長さ約1cm、幅約1.5mm。葉は先端が約まで2裂し、裂片は三角形。腹葉は小さく、舌形。キレハウロコゴケに似るが植物体が大きく、胞子体の弾糸が1本螺旋であり、和名の由来になった。近年は調査が行われておらず、詳細な調査が望まれる。

【参考文献】 2)、60)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 コヤバネゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ムカシヤバネゴケ *Cephaloziopsis exigua* (Inoue) R.M.Schust.

日本固有種。沖縄県西表島にのみ知られる。植物体は茎葉状、濃緑色、茎は匍匐し、長さ 2~4mm、枝が斜上する。葉は斜めにつき、斜めに開出し、不等に 1/3~1/5 まで 2 裂し、背側が小さく、全縁、円頭。腹葉は痕跡的。雌雄異株。花被は釣鐘形。1 属 1 種で左右非対称の葉と花被の特徴により、近縁属と区別される。1973 年に新種記載されて以来、記録がないため、詳細な調査が望まれる。

【参考文献】 25)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ヒシャクゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

タニガワヒシャクゴケ *Scapania ciliatospinosa* Horik.

日本から台湾、中国、ヒマラヤにかけて分布する。日本では谷川岳の山頂付近の群馬県側に知られ、和名の由来になっている。植物体は茎葉状、長さ 3~4cm、幅約 1.5mm。葉は接在し、不等に 2 裂し、強く 2 つに折れ畳まれ、小さい背片と大きな腹片になる。折り目は曲がったキールになる。背片は卵形、腹片は背片の約 1/2 長。生殖器官は未知。キールが短く、葉縁に 1 細胞からなる長毛状の歯があることで同属の他種から区別される。1977 年に報告されて以来、記録がなく、詳細な調査が望まれる。

【参考文献】 21)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 ヒシャクゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ツバサヒシャクゴケ *Scapania crassiretis* Bryhn

北半球の寒帯に分布し、日本では北海道知床半島羅臼岳の岩上に知られる。植物体は茎葉状、長さ 1~3cm、幅 2~3mm。不等に 2 裂し、強く 2 つに折れ畳まれ、小さい背片と大きな腹片になり、折り目が明瞭なキールになる。背片は長卵形、縁に 2~3 細胞長の鋸歯がある。腹片は背片の約 1.5 倍、橢円形。葉身細胞に大きなトライゴンがある。和名は葉のキールに幅広い翼部があることによる。最近は調査が行われておらず、再調査が望まれる。

【参考文献】 12)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 オヤコゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

フィリピンオヤコゴケ

Schistochila aligera (Nees & Mont.) Jack & Steph. (Syn. *S. philippinensis* (Mont.) Nees)

東南アジアに広く分布するが、日本では徳之島（奄美諸島）の井之川岳の山頂近く（標高約 600m）の常緑樹林内で採集されたのが唯一の記録である。林床に散在する岩にへばりつくようによえる。植物体は茎葉状で長さ約 2cm、幅 10mm 前後、葉は横に広く開出し、背片と腹片に 2 裂し、腹片は狭長橢円形で鈍頭～鋭頭、縁に明瞭な鋸歯がある。葉の背片は腹片の中央部につき、腹片の 1/2~1/3 の長さ。1967 年に徳之島で最初に発見されて以来、本種についての報告はまったくない。この生育地における詳細な調査が必要とされている。

【参考文献】 53)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 クラマゴケモドキ科

DD (情報不足) [新規掲載]

トガリバクラマゴケモドキ

Porella acutifolia (Lehm. & Lindenb.) Trevis. subsp. *acutifolia*

熱帯アジア～ニューギニア、ハワイ、日本まで広く分布する。日本では1939年に沖縄島の与那覇岳で採集された記録があるだけである。常緑樹林内の樹幹や岩上に生育する。植物体は茎葉状で大型（長さ10cmに達する）、密に羽状に分枝する。葉の背片は長卵形で先は尖り、不規則な2～5個の鋸歯があり、腹片は背片より著しく小さく、基部は茎に長く流下する。日本に普通に産する亜種のトサクラマゴケモドキは葉の背片の鋸歯が長く尖り、数も多いことで区別される。沖縄島が分布の北限であり、この地域での詳細な調査が望まれる。

【参考文献】 9)、16)

執筆者：長谷川二郎（南九州大学）

苔綱 ウロコゴケ目 ヤスデゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

オキナワヤスデゴケ

Frullania okinawensis Kamim.

日本固有種。沖縄島において樹幹に着生する。植物体は茎葉状、褐色、長さ約3cm、幅約1.5mm。葉は倒瓦状に重なり、不等に2裂し、卵形の背片とヘルメット形の腹片になる。腹葉は茎径の約4倍幅、1/6-1/4まで2裂し、裂片は鋭頭。雌雄異株。花被は3稜、いぼ状突起が稜上にある。1982年に沖縄島から新種として記載され、タイプ産地でのみ知られており、和名の由来になっているが、新種記載された以後に記録がなく、再調査が望まれる。

【参考文献】 26)、66)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ユーレンキララゴケ

Cololejeunea yulensis (Steph.) Benedix

日本と中国、東南アジア、ニューギニア、ミクロネシアなどに分布する。日本では西表島の渓谷において樹木の生葉に着生する。植物体は茎葉状、長さ5～10mm、幅1～1.5mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片になる。背片は卵形、縁に微鋸歯があり、円頭。腹片は背片の約1/3長、第1歯は基部が1細胞で2細胞長、第2歯は突起状。腹葉はない。葉身細胞に小さいハピラがある。雌雄同株、花被は軍配形に近いが翼部が大きく発達する。1999年に報告されたが、1点の標本しか知られておらず、生育現況が不明であり、再調査が望まれる。

【参考文献】 67)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

ヤエヤマサンカクゴケ

Drepanolejeunea spicata (Steph.) Grolle & R.L.Zhu

日本と中国、東南アジア、アッサムに分布する。日本では西表島の渓谷においてシダの生葉に着生する。植物体は茎葉状、長さ約1cm、幅0.5～1mm。葉は倒瓦状に重なり、背片と腹片になる。背片は長楕円形、全縁、円頭、基部に2個のオセルスがある。腹片は背片の約1/4～1/3長、第1歯はくの字状の細胞からなり、第2歯はない。腹葉は広く2裂し弓形、裂片は6～10細胞長。雌株は知られていない。腹葉の長い裂片が特徴である。1999年に報告されたが、2点の標本しか知られておらず、生育現況が不明であり、再調査が望まれる。

【参考文献】 67)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 ウロコゴケ目 クサリゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

オノクサリゴケ *Lejeunea syoshii* Inoue

日本固有種。鹿児島県奄美大島、徳之島から知られ、湿った岩上に生育する。植物体は茎葉状で淡緑色からやや褐色、長さ約1cm、幅約0.75mm。葉は倒瓦状に重なり、不等に2裂し背片と腹片になる。背片は卵形、鋭尖。腹片は小さい。腹葉は横に広く、1/2まで2裂し、裂片は鋭尖する。雌雄同株。花被は西洋梨形で5稜。葉と腹片の先端が鋭く尖ることで識別される。最近は調査されておらず、再調査が望まれる。

【参考文献】 20)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 フタマタゴケ目 クモノスゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

チヂレヤハズゴケ *Moerckia blytii* (Moerch) Brockm.

ヨーロッパや北アメリカの寒帯に分布し、日本では朝日連峰、月山の高山帯の湿地に生育する。植物体は葉状、匍匐し、濃緑色、長さ2~3cm、幅数mm、中肋部は不明瞭であるが、縁が縮れているかのように波打ち、和名の由来になっている。中心束は不明瞭。雌雄異株。包膜が鱗片状で、円筒状の偽花被の周囲にあることが特徴。採集記録が古く、最近は調査されておらず、再調査が望まれる。

【参考文献】 23)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

苔綱 フタマタゴケ目 スジゴケ科

DD (情報不足) [新規掲載]

イトスジゴケ *Riccardia pumila* Furuki

日本固有種。宮崎県の渓谷の倒木上に生育している。植物体は葉状、鮮緑色、2~3回羽状に分枝し、主軸は匍匐、枝が斜上し、中肋はなく、横断面で組織分化は見られない。雌雄異株で、包膜と偽花被はなく、棍棒状のカリプトラを発達させる。大きさが長さ約1cmと非常に小さく、表皮細胞が内部細胞の1/5~1/4と小さいことを特徴とする。1991年に新種記載され、タイプ産地しか知られていないが、産地では森林の荒廃が進んでおり、詳細な調査が望まれる。

【参考文献】 7)

執筆者：古木達郎（千葉県立中央博物館）

付属説明資料 蘚苔類 参考文献

- 1) 秋山弘之, 2006. アジア産蘚苔類分類・生態ノート, 11. 蘚類フウチョウゴケ (イワダレゴケ科フウチョウゴケ属) 68年ぶりの再発見. 蘚苔類研究, 9 (4): 112–114.
- 2) Amakawa, T., 1959. Family Jungermanniaceae of Japan. I. J. Hattori Bot. Lab., 21: 248–291.
- 3) Amakawa, T., 1960. Family Jungermanniaceae of Japan. II. J. Hattori Bot. Lab., 22: 1–88.
- 4) Brassad, G. R., 1979. The moss genus *Timmia*. 1. Introduction, and revision of *T. norvegica* and allied taxa. *Lindbergia*, 5: 39–53.
- 5) Dixon, H. N., 1942. Some new Japanese mosses. *Rev. Bryol. Lich.*, 13: 16–19.
- 6) 古木達郎, 1987. 西表島産苔類数種について. *Hikobia*, 10(1): 73–75.
- 7) Furuki, T., 1991. A taxonomic revision of the Aneuraceae (Hepaticae) of Japan. J. Hattori Bot. Lab., 70: 293–397.
- 8) 古木達郎, 1998. 日本新産クサリゴケ属3種と日本産クサリゴケ属一覧. 蘚苔類研究, 7 (4): 124–133.
- 9) Furuki, T., 2000. Taxonomic status of *Porella tenera* M.Hara (Hepaticae) described from Shikoku, Japan. *Bryol. Res.*, 7 (11): 341–342.
- 10) Furuki, T. and S. Hattori, 1993. Notes on *Frullania curiosissima* Horik. (Hepaticae) known from Bonin Islands, Japan. *Hikobia*, 11(3): 261–263.
- 11) 古木達郎・井上正鉄, 1992. ハンデルソロイゴケ鳥海山で見つかる. 日本蘚苔類学会会報, 5 (10): 162.
- 12) 古木達郎・滝田謙謙, 1988. 北海道羅臼岳で見つかった2種の日本新産の苔類. 日本蘚苔類学会会報, 4 (12): 197–200.
- 13) Furuki, T. and K. Yamada, 1986. The genus *Radula* (Hepaticae) of the Bonin and Volcano Islands. J. Jpn. Bot., 61(10): 311–315.
- 14) Hasegawa, J., 1980. Taxonomical studies on Asian Anthocerotae II. Some Asian species of *Dendroceros*. J. Hattori Bot. Lab., 47: 287–309.
- 15) 長谷川二郎, 1983. 種子島の *Colura inuia* について. 日本蘚苔類学会会報, 3 (7): 104.
- 16) Hattori, S., 1976. Studies on the Asiatic species of the genus *Porella* (Hepaticae) VI. J. Hattori Bot. Lab., 40: 121–138.
- 17) Higuchi, M. and N. Nishimura, 1998. *Neodolichomittra yunnanensis* (Musci) new to Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 24: 137–146.
- 18) Inoue, H., 1966. Miscellaneous notes on hepaticae of Japan (5). J. Jpn. Bot., 41(1): 14–16.
- 19) 井上浩, 1976. 続・日本産苔類図鑑. 築地書館, 東京. 193pp.
- 20) Inoue, H., 1977. A remarkable new species of the genus *Lejeunea* Libert from southern Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 3: 143–148.
- 21) 井上浩, 1977. 日本新産の苔類 *Scapania ciliatospinosa* Horik.について. 植物研究雑誌, 52 (10): 318–320.
- 22) Inoue, H., 1978. *Anastrophyllum ellipticum* Inoue (sp. nov., Hepaticae) from Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 4: 13–17.
- 23) Inoue, H., 1985. Studies on Pallaviciniaceae & Allisoniaceae (Metzgeriales) in Japan, 2. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 11: 1–10.
- 24) Inoue, H., 1985. Studies on Taiwan Hepaticae VI. Schistochilaceae. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 11: 109–117.
- 25) 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物 ゴケ. 平凡社, 東京. 355 pp., 192 pls.
- 26) Kamimura, M., 1982. Some addenda to the *Frullania* of Japan & neighboring areas III. Misc. Misc. Bryol. Lichenol., 9(4): 87–93.
- 27) Kitagawa, N., 1966. Revision of the family Lophoziaaceae of Japan and its adjacent region, II. J. Hattori Bot. Lab., 29: 101–149.
- 28) Kitagawa, N., 1967. Two species of Lophoziaaceae, new to Japan. Bull. Nara Univ. Educ. (Nat.), 15: 37–43.

- 29) Krayesky, D. M., B. Crandall-Stotler and R. E. Stotler, 2005. A revision of the genus *Fossombronia* Raddi in East Asia and Oceania. *J. Hattori Bot. Lab.*, 98: 1–45.
- 30) Long, D. G., 2006. Revision of the genus *Asterella* P. Veauv. in Eurasia. *Bryophyt. Biblioth.*, 63: 1–299.
- 31) Mizutani, M., 1961. A revision of the Japanese Lejeuneaceae. *J. Hattori Bot. Lab.*, 24: 115–302.
- 32) Mizutani, M., 1982. Notes on the Lejeuneaceae. 6. Japanese species of the genus *Cheilolejeunea*. *J. Hattori Bot. Lab.*, 51: 151–173.
- 33) 水谷正美, 1982. 奄美大島の *Colura*. 蘚苔地衣雑報, 9 (6): 131–132.
- 34) Mizutani, M., 1984. Notes on the Lejeuneaceae. 8. Japanese species of the subgenus *Taeniolejeunea* of the genus *Cololejeunea*. *J. Hattori Bot. Lab.*, 57: 153–170.
- 35) Mizutani, M., 1993. Notes on the Lejeuneaceae. 18. Japanese species of the genus *Archilejeunea*. *J. Hattori Bot. Lab.*, 73: 175–182.
- 36) 水谷正美, 1994. 屋久島のとげの短いクロヤバネゴケ. *Hikobia*, 11(4): 469–470.
- 37) 水谷正美, 1996. ホソバイトクズゴケについて. 日本蘚苔類学会会報, 6 (12): 244–246.
- 38) Nishimura, N., 2000. *Ctenidium molluscum* (Musci) in Japan. *Bull. Natn. Sci. Mus.*, Tokyo, Ser. B, 26: 1–6.
- 39) 野口彰, 1954. 日本産蘚類の研究 (16). *植物研究雑誌*, 29 (3): 83–86.
- 40) Noguchi, A., 1972. A revision of the genus *Macrothamnium* (Musci). *Kumamoto J. Sci. Biol.*, 11: 1–12.
- 41) Noguchi, A., 1987. Illustrated moss flora of Japan. Part 1, pp. 1–242. *Hattori Bot. Lab.*, Nichinan.
- 42) Noguchi, A., 1991. Illustrated moss flora of Japan. Part 4, pp. 743–1012. *Hattori Bot. Lab.*, Nichinan.
- 43) Noguchi, A., 1994. Illustrated moss flora of Japan. Part 5, pp. 1013–1253. *Hattori Bot. Lab.*, Nichinan.
- 44) Ochi, H., 1968. A revised list of mosses of the family Bryaceae in Japan and the adjacent regions. *J. Fac. Educ., Tottori Univ.*, 19 (1): 1–40.
- 45) Ohnishi, N. and H. Deguchi, 2003. A new species of *Schistochila* (Hepaticae) from East Asia. *Bryologist*, 106(3): 451–453.
- 46) 斎藤亀三, 1974. セン類 3 種の新産地. 蘚苔地衣雑報, 6 (6): 138–141.
- 47) Seki, T., 1969. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special reference to a statistical demarcation of the family. *J. Sci. Hiroshima Univ. Ser. B, Div. 2*, 12: 1–80.
- 48) So, M. L., 2003. The genus *Schistochila* in Asia. *J. Hattori Bot. Lab.*, 93: 79–100.
- 49) 鈴木直・岩月善之助, 2004. *Rhachithecium perpusillum* (マゴメゴケ、新称) は日本にも産する. 蘚苔類研究, 8 (9): 272–276.
- 50) Suzuki, T., Z. Iwatsuki and H. Kiguchi, 2006. *Brachydontium olympicum*, a moss misunderstood by Japanese bryologists. *J. Hattori Bot. Lab.*, 95: 199–205.
- 51) Takaki, N., 1962. A revision of Japanese *Trematodon*. *J. Hattori Bot. Lab.*, 25: 263–278.
- 52) Takaki, N., T. Amakawa, T. Osada and E. Sakuma, 1970. Bryophytes flora of Mt. Kaikoma, Mt. Senjo and Mt. Kitadake (Southern Japan Alps). *J. Hattori Bot. Lab.*, 33: 171–202.
- 53) 高木典雄・葛山博次, 1978. *Schistochila philippinensis* 日本に産す. 蘚苔地衣雑報, 8 (1): 10.
- 54) Tan, B. C. and Y. Jia., 1999. A preliminary revision of Chinese Sematophyllaceae. *J. Hattori Bot. Lab.*, 86: 1–70.
- 55) Tanaka, A. and Y. Tateishi, 2002. *Timmia norvegica* var. *norvegica* (Timmiaeae, Bryopsida) new to Japan. *Bryol. Res.*, 8 (4): 97–101.
- 56) Thiers, B. M., 1993. A monograph of *Pleurozia* (Hepaticae; Pleuroziaceae). *Bryologist*, 96(4): 517–554.
- 57) Tixier, P., 1985. Contribution a la Comnassissance des Cololejeuneoideae. *Bryophyt. Biblioth.*, 27: 1–439.
- 58) Touw, A., 2001. A review of the Thuidiaceae (Musci) and a realignment of taxa traditionally accommodated in *Thuidium* sensu amplo (*Thuidium* Schimp., *Thuidiopsis* (Broth.) M.Fleisch., and *Pelekium* Mitt.), including *Aequatoriella* gen. nov. and *Indothuidium* gen. nov. *J. Hattori Bot. Lab.*, 90: 167–209.
- 59) Váňa, J., 1972. Miscellaneous notes on the Asiatic Jungermannioideae. *J. Hattori Bot. Lab.*, 35: 312–318.
- 60) Váňa, J., 1976. Studien über die Jungermannioideae (Hepaticae) 10. *Nardia*. *Folia Geobot. Phytotax.* Praha, 11:

367–425.

- 61) Watanabe, R., 1972. A revision of the family Thuidiaceae in Japan and adjacent areas. *J. Hattori Bot. Lab.*, 36: 171–320.
- 62) 山口富美夫, 2006. 蘚苔類. 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 菌類編 植物編レッテークデータおきなわー, pp. 361–393. 沖縄県文化環境部自然保護課.
- 63) 山口富美夫・関太郎, 1983. *Cylindrocolea tagawae* は日本にも産する. 日本蘚苔類学会会報, 3 (7): 103.
- 64) 横山勇人・山口富美夫・西村直樹・古木達朗・秋山弘之, 2007. 屋久島 (鹿児島県) の蘚苔類目録. 蘚苔類研究, 9 (6): 159–197.
- 65) 湯澤陽一, 2000. 日本のヤスデゴケ属 (ヤスデゴケ科, 苔類) I. 自然環境科学研究, 13: 1–24.
- 66) 湯澤陽一, 2001. 日本のヤスデゴケ属 (ヤスデゴケ科, 苔類) II. 自然環境科学研究, 14: 1–47.
- 67) Zhu, R. -L., D. G. Long and T. Yamaguchi, 1999. *Cololejeunea yulensis* (Steph.) Benedix and *Rhaphidolejeunea spicata* (Steph.) Grolle new to Japan, with taxonomic notes on *Cololejeunea obliqua* (Nees & Mont.) Schiffn. *J. Bryol.*, 21(4): 293–297.
- 68) Zhu, R. -L. and M. L. So, 1998. Reappraisal of *Cololejeunea ceratilobula*, *C. formosana*, and *C. reineckeana* (Hepaticae, Lejeuneaceae). *Taxon*, 47: 839–842.
- 69) Zhu, R. -L. and M. L. So, 2001. Epiphyllous liverworts of China. *Nova Hedwigia*, Beiheft 121: 1–418. J. Cramer, Berlin.

和名索引

アマカワヒメゴヘイゴケ	VU	10	トガリバクラマゴケモドキ	DD	16
イトスジゴケ	DD	17	トゲバウロコゴケ	CR+EN	5
イヌイムシトリゴケ	VU	11	ヌマシノブゴケ	CR+EN	3
イボヤスデゴケ	VU	10	ノグチゴケ	CR+EN	2
オオイチョウゴケ	DD	14	ハンデルソロイゴケ	VU	9
オオシカゴケ	CR+EN	4	ヒトスジウロコゴケ	DD	14
オオシマヨウジョウゴケ	VU	11	ヒラウロコゴケ	VU	9
オオハラバクサリゴケ	VU	12	フィリピンオヤコゴケ	DD	15
オオミズゴケモドキ	CR+EN	5	フウチョウゴケ	CR+EN	3
オガサワラキプリツノゴケ	VU	12	フクレヤバネゴケ	VU	8
オガサワラケビラゴケ	CR+EN	5	ホソバイトクズゴケ	CR+EN	6
オキナワサイハイゴケ	VU	12	ホソバゴケ	VU	7
オキナワヤスデゴケ	DD	16	マエバラアミバゴケ	CR+EN	4
オチクサリゴケ	CR+EN	6	マエバラナガダイゴケ	CR+EN	2
オノイチョウゴケ	CR+EN	4	マゴメゴケ	DD	13
オノクサリゴケ	DD	17	マルバイチョウゴケ	DD	14
オリンピックゴケ	CR+EN	2	ミツデモミジゴケ	DD	13
カギヨウジョウゴケ	VU	11	ミヤマウロコゴケ	DD	14
カマバコモチゴケ	CR+EN	3	ムカシヤバネゴケ	DD	15
カラフトイチョウゴケ	CR+EN	4	モグリゴケ	CR+EN	5
キヤスデゴケ	VU	10	ヤエヤマサンカクゴケ	DD	16
キララヨウジョウゴケ	CR+EN	6	ヤクシマオヤコゴケ	VU	9
コダマイチョウゴケ	DD	13	ヤツガタケウロコゼニゴケ	CR+EN	7
ゴマダラクサリゴケ	CR+EN	7	ヤマトケクサリゴケ	VU	11
サカワヤスデゴケ	CR+EN	6	ヤマトヤハズゴケ	CR+EN	7
スギバシノブゴケ	VU	8	ヤワラクシノハゴケ	CR+EN	3
タガワヤバネゴケ	VU	8	ユーレンキララゴケ	DD	16
タチクモマゴケ	VU	9	ラクヨウクサスギゴケ	CR+EN	2
タニガワヒシャクゴケ	DD	15	リシリツボミゴケ	DD	13
チヂレヤハズゴケ	DD	17	リュウキュウシグリゴケ	VU	10
ツバサヒシャクゴケ	DD	15	リュウキュウホソエゴケ	VU	8
ツメクサリゴケ	VU	12			

改訂レッドリスト 付属説明資料

蘚苔類

平成 22 年 3 月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課

エコマーク認定の再生紙を使用しています。(古紙含有率 100%)